



左から良平さん、娘の紗英ちゃん、奥さん、おばあさん、お母さん、お父さん、犬のフクちゃん、猫のコトラちゃんとともに。



苗の段階でストレスを与えないよう、温度管理には気を遣う。



おじいさんの代からの農機具を今でも手直ししながら使っている。

工学から農業の道へ、 創意工夫を モノづくりに活かす。



されるため、はじめはハウスで苗を育てる。逆に、成長してからは、ある程度の寒さが必要になる。霜をかぶった広島菜は、繊維が柔らかくなり、甘みも増しおいしくなるからだ。「わずか1ミリ程度の種が、数か月後には2キロを超えるまで大きくなります。収穫し、出荷するときのうれしさは、何物にも代え難いものがありますね。今年も出来が良く、出荷が楽しみです」と笑顔を見せる。

広島菜栽培のノウハウは、父の良孝さんから学んだ。「まじめな性格だから、覚えるのが早くて仕事が丁寧。安心して任せています。今後は、天候や季節の状況を考えながら、先を読んで仕事ができるようになってほしい」と良孝さん。良平さん自身も地域の若い営農家で組織する「川内若農家会」に所属し、農業の未来を考えながら、熱い議論を交わしている。「仲間から新鮮な意見を聞くことができ、刺激になっています。家では89歳の祖母もいまだに畑に出ています。農業に携わって10年近く経ちますが、鍬の使い方ひとつをとっても学ぶことはまだまだたくさんあると感じています」

**農業も、子育ても、
誠実に、ひたむきに。**

昨年、待望の長女が誕生した良平

失敗と工夫を繰り返し 知った農業の魅力。

安佐南区川内、広島菜の発祥の地といわれているこの地で、現在、広島菜を生産している藜丸良平さん。ハウスと露地を合わせて30aほどを栽培している。「祖父の代から広島菜を育てています。この辺りの水はけの良い砂土が、広島菜の栽培にとっても適しているようです」

川内の地で育った良平さんは、大学では電気電子系を修学、その後農業の道へ。新たな挑戦だったが、幼いころから父が行う農業を手伝っていたため、特に不安はなかった。「初めに父からエダマメを任せられたのですが、どうすれば収穫量を上げることができるとも考えました。種を撒く間隔ひとつひとつも適正なものがある。工夫して良い方向へ進めば結果に反映されるところにやりがいを感じました」理屈を考え、実行し、失敗しても次に活かす。大学時代の理系の学びと農業は、案外近いところにあったのかもしれない。

刺激を受けながら 今も学ぶ野菜作り。

藜丸家の広島菜の栽培は、まずポットに種を落とすところから始まる。種の段階で温度が低いと成長が阻害

される。奥さまから「イクメンですよ」と言われるほど、育児にも積極的に取り組んでいる。農業に、育児に、毎日忙しく過ごしているが、今しか経験できないこの時間を満喫し、子どもとお風呂で遊ぶ時間を、一番の幸せに感じている。「通勤時間もありませんし、残業もほぼないので、農業は子育てに向いていると思います。以前に比べて、家族のために頑張らないといけない、という思いが強くなりました」

広島菜という伝統ある地域の特産品に関わることができた喜びを感じながら、これからも農業に関わり続けていきたいと語る良平さん。二つひとつの作業を丁寧にこなすことの大切さを感じながら、今日も愛する家族に見送られ、畑へと向かっている。

My History

マイ・ヒストリー

2005年 大学卒業後、農業の道へ
2014年 奥さまと結婚
2016年 長女誕生

My Dream

マイ・ドリーム

広島菜の育て方を追求していきたい。

私の好きな言葉
急がば回れ

